

この研修に参加するあたり、今私が「どんなポテンシャルを持っているか」を再分析し、そのポテンシャルをつなぎ合わせて「1本の軸」「仕組み」にまとめ上げていくためのヒントを得たいと思い、この研修に臨んだ。ポテンシャルとは、自分自身が勤務する職場や、ボランティアとして参加している市民グループ、私が個人的に行っている活動などのことで、そこに一本の軸を通すことで、より多くの人が自然に興味を持つためのきっかけや、保全へのアクションへとつなぐ仕組みが作れるのではないかと、思ったからである。そのような思いを持って臨んだ研修だったが、得た学びや気づきはとても大きく、想像以上だった。見て、聞いて、感じて、大きく揺さぶられ、圧倒的な“自分の小ささ”を感じ、大きな衝撃も受けた。が、それでも確実に変化は起こせるのだと、たくさんの勇気ももらった。これから何をどのように生かしていくのか、少し整理して伝えたい。

1. 訪問団体の活動やマネジメントなど、どの部分を日本のNPOとして生かせるか

今回圧倒的に意識させられたのは、「社会」を変えることは、「政治」を変えること」ということだった。そもそもNPOは「社会」を変える仕組みのひとつだが、社会を「大きく」変えるためには、「政治」を変えていく必要があるのだと、ドイツの活動を見てはっきりと意識させられた。

日本のNPOは小規模なものが多く、「身の周りを変える」というところで手一杯になっていることも多い。もちろん、地域に根差した課題に向き合い、「小回りが利く」フットワークの軽さは大切だ。しかし、それだけでは「大きく社会を変えることはできない」ということを、見せつけられたように思う。

ドイツには会員規模50万人を越える大きな環境NPOが2つもあり、NABUもBUNDも「徹底的な民主主義」により、地域→州→国というボトムアップ型で、市民の声を会の運営に生かしている。認定されたNPOなので、都市計画や工事などによって環境が改変・破壊される場合には、政府に対して意見を言う権利を持っており、自然保護・環境保護の立場からの意見書を政府に届け、それによって、政策がより環境に配慮したものに變更、または計画自体が中止されるなど、保全に関する実績を積み上げている。この2つの大きなNPOは、自然環境を保全していくにあたってドイツで必要不可欠な存在であり、会員数50万人以上という「数」の力と、明確な軸を持ち、ミッションを成し遂げる「質」の力によって、市民・行政からも頼られる存在となっている。会員の中には生物や地質の専門家、政治家や行政職員なども多く存在しており、「どんな立場であっても一市民」という考えの元、職業や立場に関わらず自由に市民活動ができる文化があること、またそれによって会員の幅が広がり、実現できる活動の質や幅が広がることも、大きな強みなのだと感じた。

そもそも日本は「中央集権」、ドイツは連邦制の「地方分権」、しかも「徹底的な民主主義」という圧倒的な背景の違いはあるけれど、それでも「社会」を本気で変えようと思ったら、「政治」に対するアプローチは、避けては通れない必要な視点になっているのだと認識させられた。

とはいえ、文化も成り立ちもドイツとは違う中で、日本の NPO がそこに急にシフトするのは難しい。しかし、いくつかのキーになる視点を持ちながら、少しずつその文化を形成していくことは可能なのではないか、と思っている。ドイツで NPO が政策に意見できる権利を持つことができたのも、地道な市民活動の結果であり、最初からその権利があったわけでは無い。日本においても、今後そのような視点を持ちながら、活動を積み上げていく必要があると感じた。

政治を変えるために持つておくべき視点としては、「法律」へのアプローチ、「中立性」を保つこと、そして「数の力」の大きく3つだと考える。

「法律」は、それによって政策が決定されるものなので、自然環境を生かすも殺すも「法律」によるところが大きい。アプローチとしては3つ、「守るべき法律」「変えるべき法律」「新しく作るべき法律」について、しっかりアクションしていくということだ。

「守るべき法律」は、現時点において環境を保全するために有効な法律で、それが「ちゃんと守られているかどうかをチェックする」ことが、ひとつ大切な視点となる。法律に違反している場合は、罰することが可能となるからである。

「変えるべき法律」は、環境の保全に対して有効に働いていない法律で、今後改正のアクションが必要となるものである。例えばドイツでは、ナチス時代に作られた古い「鉱山法」により、「人の生活」よりも「鉱物の採掘」が優先されるという現状が続いている。採掘のために町が丸ごと買い取られ、取り壊され、大地が大きくえぐり取られる大規模な採掘が今でも行われている。法律を変えることができれば、守ることができる暮らしと環境がある。

「新しく作るべき法律」は、その時代に合わせて生み出していく必要があるものである。訪問先で、「この法律の成立があつと半年早ければ、この地域は開発されずに済んだのに…」という事例を聞き、新たに作られる法律の重要性を改めて認識した。

そのような視点を持って、NABU や BUND は「法律」と闘う活動をしている。一般的に、環境の破壊があると、批判の矛先は破壊行為をしている「個人」や「企業」に向けられることが多いが、NABU や BUND はそうではない。「そのような破壊行為を許している法律や政府が間違っている」という視点を持ち、そこに対するアプローチをしているところが、非常に明確で合理的だと感じた。「個人」や「企業」ではなく、「法律」と闘う。この視点は、日本でも持つておくべきものだと思う。

そのように政治的なアクションを起こすとなると、「中立性」という立場がより重要になる。「偏り」があると「信頼性」も減少してしまうので、NABU や BUND は「中立性」を保つために、いくつかの工夫をしている。例えば、一部の政党の意見だけを聞くのではなく、全ての政党と満遍なく対話をしたり、そのロビー活動の様子をメディアで発信したりすること。また、寄付や助成金はプロジェクトの実施に充てることはあっても、団体の「運営費」には充てないこと、などである。団体の運営自体を会費収入のみで賄うことによって、運営に関して政府や企業の影響を受けなくて済むよう、独立性を保っている。

そして最後の「数の力」。賛同する人が多ければ多いほど、人や政策を動かす力は大きくなる。そのことを、NABU や BUND の活動で実感した。どんなにいい活動も、「数」が少なければ、その声は届きにくい。いかに賛同する人を増やすかということは、大切な要素だ。小さな団体がひとつで声を上げるより、共通の目的に関して、互いに協力しネットワークを組んで行動していくことが、今後日本でも必要な動きになると感じた。

「政治を変える」ということは、これまで少し離れたもののように感じていたが、そこを見据えた上で活動を蓄積していくことが、これからの日本のNPOには不可欠な要素なのだと思う。その際に、上記のような視点を持つておくことは、信頼性を確保しながらアクションをするために、必要なことなのではないかと考えている。

2. 研修を通して、日本の環境NPO活動を支援するために、どのような仕組みが考えられるか

活動する“人”へのアプローチ

- そそのかす — まずは、啓発活動。「市民活動をしたい」と思う人の分母を増やす
- つなぐ — 「何かしてみたい」と興味が出たら、その人のニーズに合わせて、
実際に活動をしている団体やNPOとマッチング
- のせる — その人が行動に移せるよう、バックアップ

一見すると、ただのコーディネート事業のように見えるが、この役割を「市民活動センターでは“ない”組織」が担うことで、これまでとは違うアプローチができると考えている。「環境情報センター」や「ボランティアセンター」のような形だと、それに「興味がある人」しか集まらない。もちろん、そのような意識の高い人たちの存在は大事であるが、より市民活動のすそ野を広げていくためには、「それ以外の人」へのアプローチがカギとなってくる。

ドイツに比べると、日本は市民活動に参加する人が圧倒的に少ないと感じた。「市民の意識の底上げ」が必要で、もっと自由に市民活動に参加できる文化を作っていく必要がある。そのひとつの案として、「雑多に人が集まる場所」と、「そこに合った情報発信の仕方」を工夫することを提案する。それによって、これまでアプローチできていなかった人にも活動を広げられる可能性がある。

例えば、この役割を「諫早市こどもの城」が担うと、“遊び場”だと思ってふらっと来た子育て世代の家族にアプローチすることができる。そのような家族にとっては「予定外」の情報を手にすることになり、これまで空白だった部分へのアプローチができる。「ほしい情報をほしい人が手に入れる」という「当たり前前の組み合わせ」も必要だが、「ほしいとは意識していなかった人に情報を届ける」という「棚ぼた的アプローチ」も組み合わせることで、より活動のすそ野を広げていくことができると考えている。

研修中に訪れたマインツ市の環境情報センターは、ごみの分別や環境に関する情報を提供する施設ではあるが、市民が立ち寄りやすい「街中」に拠点を置き、指定ごみ袋をその施設で配布することで、ある意味市民が「強制的に立ち寄る仕掛け」を作り、より多くの市民に情報を届けることに成功している。そのような視点で身の回りを探せば、情報発信や活動のコーディネートに適した場や空間というのはあるはずだし、情報発信の仕掛けや工夫でアプローチを広げることは可能だと考える。まずは、諫早市内の活動をリサーチした上で、市民と活動をつなぐことができるよう、こどもの城を拠点として動いてみたい。

併せて、こどもの城を「ネイチャーセンター」として拠点化していくことも考えている。この施設を訪れる子どもたちや家族が、地域の自然を五感でしっかりと感じ、体験することに加え、興味を持ったら「自分で調べる」「深める」ことができるような、自然に関する情報を収集・提供する拠点として活用できたらと考えている。施設内に利用できる「場所」がないので（ハード的な問題）、拠点化していくに

あたっては、もう少しアイデアを出していく必要があるが、外で五感を使ってめいっぱい遊んだり感じたりした後に、「知りたい」と思ったことを自分で調べられる環境を作ることは、体験をより深めることにつながるので、「学びの場」としてのデザインと仕組みを整えていきたい。自然に興味が無い人たちも訪れる場所だからこそそのポテンシャルを生かし、親も巻き込んだ幼児期の環境教育の実践と、外部への普及に今以上に力を入れ、人と自然をつなぐ場所、人と人とをつなぐ場所、人と NPO 活動とをつなぐ場所としての拠点化を目指したい。

3. 全体を通しての感想

見て、聞いて、感じて、仲間と共に学び合った 10 日間。ぎゅっときゅっと濃縮された、非常に密度の濃い時間を過ごさせていただいた。

たくさんの人に出会い、一番感じたのは、活動に対する「情熱」と「継続性」。それも、中途半端ではない「圧倒的な情熱」だった。出会う人たちからにじみ出るオーラはどれも凛としていて、誇りが感じられた。中でも大きく心を動かされたのは、ヤンゼンさんとの出会い。取り扱う問題の大きさと人間の力の小ささに、活動する気力さえも奪われてしまいそうな圧倒的にネガティブな問題にさえも、30 年もの間真摯に向き合い、「変えることができる未来」を見据えながら、ひたむきにアクションし続けてきた情熱には、とても心を動かされた。ヤンゼンさんと一緒に見た火力発電のための褐炭採掘現場は、削り取られる大地のスケールがあまりにも巨大過ぎて、そしてそのために犠牲になる自然、街、その街を追われる人々への影響の大きさに、大きな大きな衝撃を受けた。ヤンゼンさんが立ち向かってきた問題の大きさと、それでもそこに向かい続ける信念と忍耐力。30 年という歳月を費やしても、まだ火力発電も CO2 排出量も減らない現状の中で、「ケルンの大聖堂が 1000 年かかってできたのに比べれば、30 年なんて大したことない」と言いきれぬ強さ。状況はあまり変わっていないように見えても、それでもなお「小さくても少しずつ変化しているんだよ」と言える、器の大きさ。圧倒的なネガティブな状況を前にしながら、ポジティブなアプローチを続けるヤンゼンさんに触れ、「一人ではできないことも、みんなで力を合わせればできるよね」と、大きく勇気づけられた一日だった。

とはいえ、問題の規模のあまりの大きさに、ちっぽけ過ぎる自分と、自分がやっていることなんて何の役にも立たないんじゃないか、という気持ちも大きく残った。

無力感を抱えたまま、その翌日に訪れたのは NABU。この日は一日、「地域の自然」を守ることに情熱をかける人たちと、たくさん出会うことができた。美しい自然に触れながら、その地域に元々あった動植物や、失われつつある多様性を守るために活動する人たちの情熱に触れるうちに、何だかほっとして、自分の心もとけてきた気がした。

この日のバスの中では「人はなぜ環境保全活動をするのか」「誰のために環境を守るのか」ということをみんなで議論した。自分のため、未来の子どもたちのため、人が生きていくため、人間の活動によって消滅してしまう生き物たちを救うため…など、様々な意見が出た。いろんな視点で出た意見を共有する中で、「どこにウエイトを置いているか」という切り口が違うだけで、結局はどれも同じことを言っているということに気づき、何だか“ストーン”と腑に落ちた気がした。“人”が主役の「環境保全」に取り組む BUND と、“自然”が主役の「自然保護」に取り組む NABU。なぜドイツに巨大な環境 NPO が 2 つも存在

しているのかという理由——そのどちらもが必要で、大切な活動なのだと実感することができた。

私が普段行っているのは、NABU 型のアプローチだが、BUND の活動を見ることによって、とらえ方の幅が変わった。これまでは常に「これでいいのか」という思いがあったが、BUND がカバーしている活動にもしっかりアプローチをかけていくことで、自分の今の活動にしっかり情熱を注いでいこう、と思うことができた。生き物の代弁者として、「人も、人以外の生きものも、全てが自分らしくあれる社会」を目指していきたいと、改めて思った。

他にも、大事にしたいキーワードや、実践したい活動もたくさんあった。

ひとつは、「明確なミッション」と「目指すべきゴールの共有」。団体としてどこに向かい、何を目標しているのか、そして何をなすべきなのか。当たり前のことだが、それが「明確化」されているかどうか、それが理事や役員だけでなく、「会員全体」にも「共有」されているかどうかということが、とても重要な要素なのだと改めて思った。「会員」もひとつの顧客。会員が誇りをもって活動に参加できるよう、もう一度「何のため」をしっかりと確認し、それを会員と共有した上で、これからの会のあり方を組み立てていきたい。

もうひとつは、「見える化」。感謝の見える化（感謝状、サプライズ）、目標の見える化（具体的数値化、グラフ化、イラスト化）など、「ちゃんと目で見て理解できる形」にすることが、人の心をつかむ大切な要素だと改めて感じた。常に相手の立場に立った情報発信をしていきたい。

長いようであつという間の 10 日間。「環境先進国ドイツ」と言われる所以を知ることができた。圧倒的な民主主義と、人々の「自由意思」、それによって生み出される様々な「制度」や「仕組み」。それと同時に、ドイツが抱えている様々な問題も垣間見ることができた。自然を守るのも人、でも、壊すのも人。矛盾を抱えながらも、行動し続ける情熱の人々が、底辺から国を変えているのだと思った。

研修全体のデザインも、明確な意図をもってしっかりと組み立ててあり、それに乗ってたくさんの気づきと学びを得ることができた。自分だけでは絶対に行けない場所、出会えない人、できない経験をさせていただき、感謝してもしきれないくらいのボリュームがあった。これだけの研修を組み立てるのに、どれだけの手間と労力がかかっていたのか。研修先を開拓するリサーチ力、交渉力、人のご縁、研修先と積み重ねてきた歴史、いろいろなものが積み重なっての今回のだと、その大きさを感じた。たくさん思いが詰まったこの研修に参加させていただくことができ、改めて、ありがたいことだと思った。

学びを共にした梅ちゃん、むっちゃん、ちいちゃん、りょうすけ、コータロー、乗り物酔いがひどい私の体調を気遣い、たくさんサポートしてくれてありがとう。長期の休みにも関わらず快く送りだしてくれたこどもの城の仲間たち、そして、セブン-イレブンの店頭で募金をしてくださった皆様に、心から感謝いたします。学んだことを、必ず社会に返して行きます。